

スピノザ著『知性改善論』岩波文庫、岩波書店 1932年4月5日刊を読む

## 知性の諸特性

私が特に注目した、そして明瞭に理解する知性の諸特性は次のようである。

1. 知性は確実性を包含する。

言い換えれば、知性は事物が知性の中に想念的に(観念として)含まれている通り形相的に(実在的に)存することを知る。
2. 知性は或る事柄を絶対的に知覚する。
  - (1) すなわち或る種類の観念を絶対的に形成する。
  - (2) しかし又或る種類の観念はこれを他の観念から形成する。
  - (3) 例えば量の観念は他の思想を考慮に入れずに絶対的に形成するが、運動の観念は量の観念を考慮に入れてのみ形成する。
3. 知性が絶対的に形成する観念は無限性を表現する。
  - (1) これに反して他から形成するのは限定された観念である。例えば知性が量の観念を原因によって知覚するなら、知性はそれを量を通じて限定しているのである。
  - (2) 立体が或る平面の運動から、平面が線の運動から、更にまた線が点の運動から生ずると知覚する時の如きである。
  - (3) こうした知覚はしかし、量そのものを理解するのには役立たず、ただ量を限定するのに役立つのみである。
  - (4) これは次の事実から、すなわち、我々はこれらの知覚をいわば運動から生ずると考えているが、しかし運動は、まず量そのものが知覚されなくては知覚されないという事実から明らかである。
  - (5) 同様にまた我々は、線を形成するための運動を無限に継続することが出来るが、それはもし我々が無限の量という観念を持たなかったなら、決して出来なかったであろう。
4. 知性は否定的観念よりもまず肯定的観念を形成する。
5. 知性は事物を持続のもとによりも或る永遠の相のもとに(sub quadam specie aeternitatis)及び無限数のもとに知覚する。

(1)あるいはむしろ、事物を知覚するのに、数をも持続をも考慮に入れない。

(2)しかし事物を表象する時には、これを一定の数・一定の持続及び量のもとに知覚する。

6. (1)我々が明瞭且つ判明に形成する観念は、我々の本性の必然性だけから生ずるように見え、絶対的に我々の能力にのみ依存する観がある。

(2)混乱した観念はこれと反対である。

(3)すなわちそれはしばしば我々の意に反して形成される。

7. 知性从他から形成する事物の観念は、精神によって種々の仕方で限定され得る。

例えば楕円形の平面を限定するために、紐に附着した石筆が二つの中心のまわりを運動すると虚構したり、或る与えられた直線に対して常に同じ一定の関係を持つ無数の点を概念したり、その俯角が頂角より大きいように或る斜面によって切断された円錐形を概念したり、その他の無数の仕方でなされる。

8. 観念は、その表現する対象の完全性が大であればあるだけ完全である。

実際我々は小堂を案出した建築師を、宏壮な殿堂を案出した建築師ほどには讚美しない。

P83 ~ 85

<コメント>

スピノザの名著「知性改善論」の結論。スピノザの名著「エチカ(倫理)」を読む前におすすめの作品。スピノザから、知性とは何か、倫理とは何かを大いに学びたい。

2019年10月25日(金)